キリストの光　光のキリスト

聖霊降臨の主日　5月31日

（ヨハネ15・26—27；16・12—15）

イエスが使徒たちに約束していた聖霊が遣わされた。弁護者、真理の霊と呼ばれる聖霊が父のもとから送られた。

「真理の霊が来ると、あなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる」。これから使徒たちは真理の霊に導かれることになる。

パウロはガラテヤの教会への手紙で「霊の導きに従って歩みなさい」と勧める（五章）。肉と霊は対立するから、霊に導かれて生きるようにと勧める。そうすれば霊の実を結ぶことができるから、霊の導きに従うようにと。霊の実は「愛であり、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制」。

霊と対立する肉の業は明らか。それは「姦淫、わいせつ、好色、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、怒り、利己心、不和、仲間争い、ねたみ、泥酔、酒宴、その他このたぐいのもの」。

本心が実現する

いつの時代もそうであろうが、今の世界も肉の業に充ち満ちているように見える。肉の業がいっぱいで、その中であえぎながら生きている。あえぐことにも疲れ、もう開き直り、どうでもいいとあきらめ、がむしゃらに肉の業を求める。人は孤独の中で動きがとれず、じっとしている…そのように見える。

五旬祭の日、使徒たちが一つになって集まっているところに聖霊が遣わされた。動きがとれなくなっている彼らのところに突然、聖霊が降る。一同は聖霊に

満たされて動きだす。静から動へ変わる。

その聖霊が今も送られ続けている。わたしたちにも。神の力、聖霊が降っている。真理に導く聖霊が。真理がわたしたちを照らし、自由にし、喜びを与える。

人は肉の業に生きている。しかし、本当はそんなことはしたくない。本心は別の生き方をしたいのだ。「愛、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制」。本当はこれがほしい。パウロが言う「霊の実」がほしい。そうあったらどんなに素晴らしいことか。しかし、今、それは実現する。

ある方が初めて主日のミサに参加した。それは皆でこころを一つにして平和を願うミサだった。その方は世界各地の紛争地に出掛け、災害地に出掛けて、避難民、被災者を支援している人だった。聖堂の最前列にいる彼の様子が司祭席からよく見えた。朗読される聖書のみことばにうなずき、そのうち、とめどもなく涙が流れ出る。

ミサの終わりに皆の前で気持ちを分かち合ってくれた。「紛争のただ中でどうしようもない《悪の力》にさいなまれていた。わたしはこのミサに参加することで深く傷ついていたこころが癒やされた。わたしはここからまた世界に派遣されていきます。ありがとうございました」

一同で聖霊降臨を体験し、祝ったような時だった。

（山元眞＝福岡教区司祭／カット＝高崎紀子）

今週の福音

6月

1日・月 マルコ12・1―12
2日・火 マルコ12・13―17
3日・水 マルコ12・18―27
4日・木 マルコ12・28b―34
5日・金 マルコ12・35―37
6日・土 マルコ12・38―44